

遷延性意識障害患者の随意運動に対する認知的介入としての音楽療法の効果

Effect of cognitive music therapy for voluntary movement of persistent consciousness disturbed patient

奥村 由香<sup>1)</sup>、奥村 歩<sup>2)</sup>、豊島 義哉<sup>1)</sup>、奥村 竜児<sup>3)</sup>、辻井 知香子<sup>1)</sup>、平林 美樹<sup>1)</sup>、  
西村 和好<sup>1)</sup>、中村 美津<sup>4)</sup>、石山 光枝<sup>4)</sup>、篠田 淳<sup>2)</sup>

木沢記念病院 中部療護センター リハビリテーション<sup>1)</sup>、脳神経外科<sup>2)</sup>、放射線科<sup>3)</sup>、  
看護部<sup>4)</sup>

Yuka Okumura<sup>1)</sup>, Ayumi Okumura<sup>2)</sup>, Yoshiya Toyoshima<sup>1)</sup>, Ryuji Okumura<sup>3)</sup>, Chikako Tsujii<sup>1)</sup>,  
Miki Hirabayashi<sup>1)</sup>, Kazuyoshi Nishimura<sup>1)</sup>, Mitu Nakamura<sup>4)</sup>, Mitsue Ishiyama<sup>4)</sup>, Jun Shinoda<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>Chubu Medical Center for Prolonged Traumatic Brain Dysfunction, Kizawa Memorial Hospital

【はじめに】随意運動には、本能的なものと、目的を持って外界に働きかけていくものがあるといわれている。今回、不快刺激に対する運動は見られるがコミュニケーションなど認知的な障害のため働きかけに応じることがなかった遷延性意識障害患者が自ら楽器を鳴らすようになった症例から、認知的介入としての音楽療法の効果について脳機能検査とあわせて検討する。【症例】18歳男性、重度の遷延性意識障害。【方法】音楽療法は、音楽聴取、他動的楽器演奏などによる感覚刺激を中心に施行し経過を観察した。脳機能検査は、音楽療法施行中及び長期的な脳血流の変化についてECD-SPECTのBEAT解析と3DSRT解析を施行した。また経時的にFDG-PETを施行した。【結果】他動的演奏の働きかけに対し全く無動になる状態が約8ヶ月間続いた後、自ら指を動かしギターを鳴らす行為が見られるようになり、パチを持ち太鼓を叩くなどより操作的な運動が見られるようになった。音楽療法施行中の脳血流の有意な増加領域は側頭葉、視床、基底核、長期的にはこれらに加え、前頭葉、帯状回、後頭葉などほぼ全領域であった。FDG-PETでは前頭葉、帯状回を中心とした代謝の著明な改善を認めた。【考察】認知的な障害はあるが上肢の運動機能が残存していた本症例において、音楽は快刺激であり楽器演奏は行為と結果の因果関係が認識しやすい活動であったため運動開始の指令が出され音出し行為が見られるようになったと考えられる。音楽療法施行時の脳血流においても、側頭葉、視床、基底核の血流が増加していることから、音楽療法は随意運動の認知的な機能に関与した可能性があると考えられる。